

令和5年度 特色ある教育・経営の取り組みを行う私立学校の事例集

SDGs副専攻課程の開設

多角的にSDGsを学ぶ

学校法人 目白学園
目白大学

◆ 目白学園 目白大学の紹介

目白大学は、1994年に創設。文系6学部12学科を新宿キャンパスに、保健医療・看護系の2学部4学科をさいたま岩槻キャンパスに設置する、約5600名の学生が学ぶ総合大学です。同大学を設置する学校法人目白学園は、前身である研心学園の創立から、2023年で100年の節目を迎えました。学園創立者である佐藤重遠先生が示した「主・師・親」を建学の精神とし、「育てて送り出す」ことを使命に掲げ、変化の激しい現代社会を生き抜く人材を育成しています。

◆ 環境保全の取り組み

2010年、理事長直下に組織された「学校法人目白学園地球環境の保全と低炭素社会への貢献推進委員会」において、2011年4月に「目白学園環境宣言」が採択されました。これは、「森の学園」の愛称で親しまれる新宿キャンパスで以前より行われている、樹木の剪定・施肥による植栽管理、太陽光発電や太陽熱利用、中水道システムや透水性インターロッキングなどの環境保全の取り組みを拡大し、環境に配慮した

エコキャンパスづくりを全学的に推進するものです。

2015年に、国連サミットでSDGs（持続可能な開発目標）が採択され目標の概念が国際的に広く知れわたるようになりました。この国際的な目標の多くが、これまで同法人が取り組んできた内容と合致したことから、2019年4月に前述の委員会を「エコキャンパス及びSDGsプロジェクト推進委員会」として拡大改組しました。組織を再編成した背景には、さまざまな学科や部署を横断する教職協働のSDGsを取り入れること、低炭素から脱炭素の時代への変遷に適応すること、エコからサステナビリティへと発展的に拡大していくことなどが挙げられます。この推進委員会は、両キャンパスの各学部・学科から推薦された30名以上からなる教職協働の組織体です。まずは同年初夏、両キャンパスの外壁に、SDGs 17の目標を大きく掲げた「SDGsラッピング」を取り付けました。学生や教職員の目に留まりやすくすることで、SDGsの認知度向上を図り、学園全体での目標達成を推進するために、意識の共有を促しています。

一連の取り組みは、2010年当初より委員長を務める社会学部の飛田満教授が主導しています。



◆ 副専攻課程の展開

目白学園第4次中期計画（2019～2023年度）で「ワールド教育×DX教育による未来型実践家の養成」というブランディング目標が掲げられ、全学的構想のもと、SDGs副専攻課程とDX副専攻課程が設置されました。2つの副専攻課程の導入はトップダウンで進められたのに対し、科目の選定など運用面はボトムアップで進められました。カリキュラムについては、各

学科長からの意見を集約し、教務課などとの調整を経て、最終的に学部長等会議において決定しました。

なかでも社会・経済・環境の諸分野を広くカバーするSDGs副専攻課程については、飛田教授が原案を作成し、委員会における検討や教務課との折衝・上部委員会の最終調整を経て学部長等会議へ諮るなど、全学的な参画によって導入に至りました。また、学科によって履修機会に差が出ないよう、講義・セミナーともに共通科目を設定しています。この副専攻課程のカリキュラムの特徴は、既存の科目の履修内容とSDGsとの関連性を検討・分析し、構築したことにあります。SDGs 17の目標が、日常生活のあらゆる場面において普遍的に存在する多様な課題であるためです。

現在は、2024年度から始まるSDGs副専攻セミナーの開設に向け、各ゼミ担当予定者が教務課と連携して、セミナーのクラス分けの方法など、運営上の細かな事項を検討しています。すでにカリキュラムは決定しており、核となる副専攻セミナーは学科が異なる5人の教員が担当します。副専攻セミナーは学生と主専攻が同一の教員のクラスには参加できませんが、様々な学科に所属する学生が集い、学際的な学びを行うことを狙っています。

さらに、将来的に副専攻科目を拡大することも視野に入れており、学生へ

の周知が十分でない学科には年度初めのオリエンテーションなどで丁寧の説明するなど、フォローアップを検討しています。

一方で、本格始動してから日が浅いこともあり、課題もあります。学部長等会議や教授会における報告で教職員への周知・協力要請をしているものの、学科によって関心に強弱があるため、SDGs 17の目標と各学科の履修内容との関連付けや業務的負担感の払拭に努めているとのことです。

◆ 副専攻課程設置の効果

SDGs 副専攻課程を履修するためには、まず1年次で、遠隔授業で行っているオムニバス形式の共通科目「持続可能な社会を考える」の必修が条件です。この科目は春期・秋期ともに履修登録者が150人を超えており、専攻分野による偏りは見られません。年次が進めば、2024年度から始まるセミナーなどにおいて、学生たちのSDGsに対する意識の変化や、目標達成に向かう主体的な行動が期待されます。さらに、5つのセミナーがあることにより、入学後に所属学科の学びと自身の興味・関心とのミスマッチが起きても、副専攻課程の中に学びたいテーマが見つければ、退学の抑止につながる可能性もあると推測しています。また、SDGs 副専攻課程は新宿キャンパスの6学部限定ですが、さいたま

岩槻キャンパスや短期大学部でも、通常授業のなかでSDGsを取り入れています。

学内においては、特に職員の意識変化が見られるようになりました。管轄部署である管理課がフアシリテイ関連などの中心となるほか、入試広報部がSDGsに関する取組みをウェブサイトや大学案内などで紹介したり、学生課がエコアクションのサポートや区と

SDGs副専攻 カリキュラム表

科目区分	科目名	科目位置	配当年次	単位数	17ゴール	修了要件	
必修科目	総合科目	持続可能な社会を考える	共通科目	1	2	01~17	2科目4単位必修
		グローバルな視点で学ぶ社会と人間	共通科目	2	2		2科目4単位必修
	副専攻ゼミ	SDGs基礎セミナー	共通科目	3	2		
		SDGs特別セミナー	共通科目	3	2		
選択科目	第I群	貧困に対する支援、日本と世界の経済事情、現代の社会福祉、現代教育入門、生涯学習概論、男女共同参画社会論など15科目	共通科目 専門科目	1~3	1~2	01~06	2科目4単位 選択必修
	第II群	自然科学的な視点から地球環境問題を考える、コーポレート・ガバナンス、未来を拓くイノベーション、こどもと人権、ダイバーシティ社会論、都市環境デザインなど15科目	共通科目 専門科目	1~3	2	07~11	2科目4単位 選択必修
	第III群	社会生活のデザイン、環境倫理学、自然地理学概説、法学入門、現代グローバル・イシュー概説、観光と国際協力など15科目	共通科目 専門科目	1~3	2	12~17	2科目4単位 選択必修

修了要件は、必修科目8単位、選択必修科目12単位以上(第I群~第III群よりそれぞれ4単位以上)、合計20単位以上

連携したフードドライブやパントリーを主導したりしています。法人としても、『東洋経済ACADEMIC SDGsに取り組み大学特集』(東洋経済新報社)への記事掲載の働きかけや、財政的支援を行なうなどしています。

飛田教授は、地球環境問題・社会的課題の解決、持続可能な社会の実現のため、担い手の育成や大規模事業者の一人としての行動が、大学や学校法人の社会的責務であると考えています。また、同大学には理工系の学部がないため、研究開発分野への関与は薄くなりますが、社会連携や地域貢献という点において果たすべき役割があると考えています。障害を取り除き、垣根を低く間口を広くして、皆が当事者意識を持つて取り組んでいくことを目標としています。

加えて、副専攻とは別に、「SDGs 関連科目」の一覧を作成しています。SDGs 副専攻課程に組み込まれている科目かどうかに関わらず、共通科目・専門科目からSDGs 17の目標につながるかと考えられるものを積極的に選定しました。学生が履修の参考に活用できるように、ウェブサイトにも公表しています。

◆ 今後の展望

法人として見据える未来は、「大学が果たすべき社会的責務の重さを自覚し、身近なところから、全学的エコキャン

パスづくりの取組みとSDGsの達成を目指し、教育研究をはじめとするあらゆる活動を加速化する」ことです。現時点ではまだ周知の徹底・取組みの浸透などに留まるものの、今後は数値目標を掲げて取り組むことも重要であると認識しています。

◆ 取材後記

取材を通して印象的だったことは、SDGsに対する視点です。飛田教授は、SDGsとは多様性と関連性である、と述べています。「専門領域と他領域の学びを関連付け、すべてがつながっていることに気付くことが、SDGsの学びではないだろうか」、「特に資格を取る分野は視野が狭くなりやすい傾向があり、背景を知り、気付くこと、違う学びを取り込むことはいいいことではないか」とお話しされています。

2010年の「地球環境の保全と低炭素社会への貢献推進委員会」発足時から変わらず委員長として旗振り役を務め続けている飛田教授の、10年以上にわたる熱意に触れることができました。

また、次期計画期間は、目標を達成する枠組みをつくり実践する「行動の10年」としたいとお話しされており、社会連携や地域貢献の担い手となる人材を「育てて送り出す」、目白大学の使命を体現し続けています。

(取材) 私学経営情報センター